

カンボジア王国アンコール世界遺産での 海外インターンシップについて

International internship program at the Angkor world heritage site in Cambodia

木 村 誠

小松短期大学

1. 本事業の概要

平成30年8月18日から9月2日に、カンボジア王国アンコール遺跡整備公団（略称：アプサラ公団）において、公立小松大学として初めての海外インターンシップが実施された。本インターンシップは金沢大学と共同で実施するものであり、本学から4名の学生、金沢大学から4名の学生が参加した。本事業は平成22年度から金沢大学が実施しているものであり、小松短期大学からは平成27年度より3年間、毎年2名の学生が派遣されている。小松短期大学は平成28年9月2日に「アンコール世界遺産での能力開発プログラム」に関する覚書を同公団との間で締結しており、公立小松大学に継承されたこの覚書に基づいて今年度の学生派遣が実現した。なお、本事業は昨年までの4年間にわたって日本国大使館の「日カンボジア絆増進事業」に認定されている。今年度は、「日カンボジア友好65周年記念事業」の認定を受け、日本国大使館の理解と支援の下で実施することができた。2週間のインターンシップ期間中、学生は2人ずつの4グループに分かれ、担当の公団職員の指導を受けながら各自の業務に従事した。本稿では、本事業の成果と今後の課題について報告する。



Figure 1. 業務出発前の集合写真

2. 業務地の概要

業務地であるアンコール遺跡群は9世紀から15世紀にかけて栄えたクメール王朝が残した石造

建造物群であり、1992年にUNESCO世界遺産に登録されている。世界最大規模の文化遺産であるとともに熱帯の豊かな自然の中で約13万人もの住民が現在も昔ながらの生活を営んでいる。一方で、同世界遺産は世界中からの観光客が訪れる有数の観光地として成長を遂げており、その中でもアンコール・ワット寺院はトリップアドバイザー社がまとめた世界の人気観光スポット2018ランドマーク編で最も人気のある観光地に選ばれている。2017年の同寺院への訪問者数は約250万人であり、観光大臣は2020年までに年間400万人の観光客を同寺院に誘致することを目指すとして発表している。また、カンボジアの観光庁は2020年には自国に訪れる旅行者数は750万人に達する見込みと発表しており、同国における観光産業の成長は今後も加速することが予測される。このような背景から、アンコール遺跡群は観光産業の成長にともなう地域住民の生活への影響の問題、文化財保護の問題などを抱えており、学生にとっては国際化の推進や経済発展にともなう生じる課題を多面的に理解出来る非常に教育効果の高いインターンシップ地であると考えられる。

アンコール世界遺産はカンボジア王国の文化財であると同時に人類共通の文化遺産である。そのため、同世界遺産は国際的な管理組織であるアンコール世界遺産国際管理運営委員会とカンボジア国内の管理組織であるアンコール遺跡整備公団が相互に協力体制を構築して維持管理を行っている。本インターンシップは国内組織であるアンコール遺跡整備公団を受け入れ先として実施された。同公団は1995年に設立されたカンボジア最大の公団であり、アンコール世界遺産の維持管理を目的として遺跡の保存や修復のみでなく、環境管理や保全、都市計画、観光産業の調整、伝統文化の保護、地域住民の保護管理などの業務も担当している。常勤職員として約800名、非常勤職員を含めると3000人以上が同公団にて業務に従事している。同公団は事務組織を含めると14の部門から構成されており、本インターンシップは水管理部門にて実施された。受入責任者は公団副総裁のHang Peou氏であり、Hang氏は金沢大学環日本海域環境研究センターの特任教授も務めている。日本側の実施体制としては、金沢大学と公立小松大学の教職員から構成されるアンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会が事業の計画から実施までを担当した。引率業務は金沢大学教授、本学特任教授、アンコール世界遺産国際管理運営委員会特別専門家委員を務める塚脇真二氏と筆者が引率業務を担当した。また、現地での学生支援を担当するチューター学生として、昨年度同インターンシップに参加した金沢大学4年の埴崎未緒が全行程に同行した。

3. 参加学生と現地での業務

本学からの参加者は書類審査と面接試験によって選抜された。今年度は国際文化交流学部1年の大御悠瑠花、肥田望来、土橋香乃、保健医療学部看護学科1年の横井菜美が参加した。参加学生は金沢大学からの参加学生とペアでグループに分かれ、グループ毎に業務が割り振られた。グループ1の横井は西バライ貯水池の水環境管理と観光開発、グループ2の大御は北バライ貯水池の水環境管理と観光開発、グループ3の肥田はルンタエク村の地域社会支援と観光誘致、グループ4の土橋は世界遺産公園内クメール伝統家屋の維持管理に関する業務を担当した。一日の業務

の流れは以下の通りである。午前中に公団の担当職員と業務地を訪れ、公団の取組みと現状の課題などについての説明を受ける。午後は公団の本部に戻り、午前中の視察内容を踏まえて担当職員たちからさらに詳細な解説を受け、さまざまな観点からのディスカッションを行う。公団職員とのコミュニケーションは英語で行われる。また、毎日作成する業務記録も英語で作成し、公団職員のチェックを受けることとなっている。



Figure 2. 地域の子供達との触れ合い

グループ1の担当業務地である西バライ貯水池はアンコール世界遺産区域の西方にある巨大貯水池である。南北方向が2.2キロ、東西方向が8キロあり、人工の貯水池としては人類史上最大とされている。クメール王朝の水管理の中核となる貯水池であり、建設後1000年近くが経過した現在でも地域住民への生活用水の供給、灌漑用水、遺跡の保持、洪水対策等の機能を有している。近年は、美しい夕日を鑑賞できる新しい観光地としての評価が高まっている一方で、堤防の浸食や汚染物質の流入といった課題も抱えている。グループ2の担当業務地である北バライ貯水池は世界遺産区域の北部に位置する巨大貯水池であり、他の貯水池よりも標高が高いところにあるため世界遺産区域の水環境を左右する重要な機能を有している。北バライの中心にはニャックポアン寺院があり、池の中央に尖塔が立ち、その周囲に4つの池が設置されているというユニークかつ美しい寺院である。近年は多くの観光客が訪れるようになり、観光開発と自然環境の保持の問題が生じている。グループ3の担当業務地であるルンタエク村（ルンタエク・エコヴィレッジ）は郊外に作られた新しい村である。世界遺産区域内は新しい建造物の建築が禁止されており、増え続ける人口に対応した居住スペースの確保が困難である。この余剰人口への対応策として建設されたのがルンタエク村であり、土地の無償提供による自給自足の生活、特産品の開発、学校の建設などの取組みによって定住の促進と住民の生活の質の向上を目指している。グループ4の主な担当業務地はクメール民族センターであった。クメール建築には、5つの様式（Khmer house、Rong house、Rong dorl house、Rong doeing house、Peth house）があり、いずれもカンボジアの気候に適した高床式の構造で暑い日中を涼しく過ごす工夫がされている。クメール民族センターでは、この伝統的な建築様式の次世代への継承と観光客への情報発信を目的とした取り組みがなされている。

業務の無い休日には東南アジア最大の湖であるトンレサップ湖を視察し、季節によって拡大と縮小を繰り返すこと、淡水生物の多様性や水上集落の生活について学習した。さらに、観光開発に伴う環境破壊や地域社会の変化についても考察を深める機会を得た。また、シェムリアップ市内の児童養護施設への訪問も毎年実施しており、歌を歌ったり、お互いに質問をしあったりと自由

な交流を楽しむことができた。業務の最終日にはそれぞれのグループ長による面談試験が実施され、全てのグループが合格の判定を受けることができた。また、2週間のインターンシップを通じて学生各自が考えた改善点の提案などもこのときに行われている。

帰国後は成果報告会を実施し、他の学生や教職員に対して参加学生が一人ずつ現地での学びを発表した。また、和田慎二小松

市長を表敬訪問し、インターンシップの終了と成果報告を行った。その他、本学のラジオ広報番組「世界に向かって飛び立て！公立小松大学」に出演し、現地での経験を語る機会を得ている。



Figure 3. 和田小松市長への表敬訪問

4. 今後の展望と課題

参加学生の成果報告会での発表内容や報告書の記述から、この2週間のインターンシップを通じて学生達が様々な貴重な経験と今後につながる学びを得て帰国したことが窺えた。いずれの参加者も、実際の現地での滞在と、そこでの人々との触れ合いを通じてカンボジアについての理解を深めることが出来たと振り返っている。出発前に形成していたカンボジアに対するイメージと実際のカンボジアの姿の差異を実感したことは、異なる文化に接する際の姿勢や、根拠や自身の経験に基づいて意見や価値観を形成することの重要性を学ぶ機会となったと考えられる。また、公団職員の指導を受けながらの業務を通じ、世界遺産区域の中にある豊かな自然、住民の笑顔と元気に遊びまわる子ども達、そして雄大な遺跡群といった現地の光景が、公団の職員をはじめとする様々な人々の努力の積み重ねによって維持されていることに気がつき、深く考察する機会となったことがわかった。この経験は、日本という国だけでなく、自分自身が生活する地域社会のまちづくりについても新しい視点から考えるきっかけとなると期待される。また、カンボジアの経済的な発展に伴う新しい価値観の流入が地域住民の生活環境に及ぼす影響についての問題意識の高まりも確認された。ある学生は、村の人々の中にプライバシーの考え方が浸透することで、これまで受け継がれてきた地域のコミュニティの人間関係が変容する可能性についての危惧を述べており、観光開発の発展や経済的発展の抱える負の側面についても学ぶ機会となったことが示唆された。また、外国語でのコミュニケーションについても新たな気づきがあったことと、更なる語学学習への動機づけが高まったことが確認された。これら多くの教育効果が確認された一方で、これらの気づきと動機づけの高まりを学生の更なる成長に繋げるためには、帰国後のアフター・ケアの検討と実施が重要であると考えられる。海外派遣プログラムからの帰国後は、自分自身の今後の課題、将来の希望が明確になっていると考えられる。現地で感じた問題意識や感動の

経験、そしてコミュニケーションにおける苦労や悔しかった記憶が鮮やかに残っている時期には、更なる語学学習や次の目標への挑戦に対して高い動機づけの状態に置かれていると考えられる。一方で、高い動機づけに置かれた学生が確実に次の一步を踏み出せるとは限らない。この成長の機会を無駄にすることの無いよう、帰国後の有効なサポート体制の構築については、課題として引き続き検討する必要があると考えられる。

出発から帰国まで、体調不良や安全管理上の問題もなく、本学として最初の海外インターンシップを終えることが出来た。インターンシップ期間中、学生の安全と充実した就業体験をご支援いただいたアプサラ公団 Hang 副総裁、日本国大使館別所公使、在シエムリアップ日本国領事事務所実取所長をはじめ、関係の各位に心から深謝申し上げます。また、本インターンシップの実施責任者であり、本学の学生の派遣に際して多大なるお力添えをいただいた塚脇先生にも感謝を申し上げます。世界遺産でのインターンシップという稀有なプログラムが末永く継続できるよう、関係各位には本事業への変わらぬご支援を心からお願い申し上げます次第である。